

解説；

緒方洪庵を祖とする緒方家と佐々木家の交わりは佐々木隆興が研究を開始してからのことで、この他に、緒方知三郎先生も佐々木隆興について書いている（ホームページ資料室参照）。

緒方富雄先生略歴；1901(明治 34 年)大阪生まれ、1989(平成元)没。血清学者・医史学者。緒方洪庵の曾孫、緒方知三郎の甥。1926(大正 15 年)東京帝國大学医学部卒業、1936(昭和 11 年)東京帝國大学助教授、1949(昭和 24 年)同教授、1962(昭和 37 年)同退官。1963 (昭和 38 年)、(財)緒方医学化学研究所を創立し、緒方洪庵にまつわる蘭学の資料整理等を行なった。

ルイ・パスツールと佐々木隆興先生

東京大学名誉教授 緒方富雄

学者としてのわたくしの生活態度に強い影響をあたえた人は多い。そのなかでも強烈な影響をあたえたのは、ルイ・パスツールと佐々木隆興先生であろう。

わたくしがパスツールに心をうばわれたのは、かれの胸のすくような独創性の高い研究はもとよりであるが、それよりももっともっとすばらしいのは、かれの徹底した善意である。それが時によってかれの人類愛となり祖国愛となる。またそれが個性のはげしさとなつて、論敵をうちのめし、また敵をつくる。

パスツールにも敵があったということは、わたくしに大きな安心感と勇気とをあたえた。わたくしが“敵”を意識したとき、パスツールをおもい出して、自分をなぐさめ、また勇気づけた。もとよりパスツールには、人類と祖国への大きな寄与があった。わたくしの寄与など、小さなものなのに、パスツールにすがって、敵にたいして強くあろうというのは、ムシがよすぎるが、しかたがない。それがわたくしの心のささえになっていたのは事実である。

わたくしが佐々木隆興先生にしたしく接したのは、佐々木研究所で勉強させていただいた 1 年間にすぎない。それでいて、わたくしは学者としての“本格的”なありかたを、ふかくふかく教えられた。説教されたわけではない。ただひとことふたこと注意のことばにすぎない。あとは先生の日常の行動、考えかたなどから、わたくしが感じとったのである。

先生は剣道の達人であったそうである。そのうえ漢籍にもふかく、基本的にはだれよりもドイツ的に教育された先生であるのに、晩年にはきわめて東洋的な風格をそなえていられた。

ひとことふたことで、ピンとわたくしに伝わるものがあったのは、先生が東洋的な修養に徹しておられたからであろう。先生の晩年に、先生をおもいだすだけで、わたくしの心が小さくいじけてしまうおもいがするようになって、お目にかかるのがこわくなってしまった。先生のなくなった今日でも、なおその気持ちがなくなならない。わたくしの修養がたりないからである。

(実験治療、1967 年、5 月号)